

「間取りは多分同じですよ。出て左手が洗面所です。そこで、この中の服に着替えてきてください」

疑問を口にする間もなく、背中をぐいぐい押されてリビングの外に追いやられる。通販会社のロゴが入った段ボール箱の宛名シールには「永森篤士」と書いてある。ながもりあつし、って読むのかな。こういう漢字なんだ。

恐る恐る中を覗くと、ぬいぐるみのようにもこもこした白と黒の布の塊が丁寧に畳んで入っていた。

白い方を広げてみる。パーカーだ。フードには黒くて丸い耳が二つ付いている。袖も黒い。

（パンダ、だよね……？）

黒い方は普通の長ズボン。タグが付いているから未着用だと思う。ファッション雑誌でよく特集が組まれている、ちゃんとしたルームウェアブランドのものだ。

もっと変な—————というか、えっちな服が入ってるんじゃないかと思っていたか

ら、少し安心した。しかし、頭の中に別の疑問が浮かび上がる。

地味で目立たないとはいえ、一応私も華の女子大生。そして、この家には「お礼をする」という名目で上がらせてもらっているわけで。

（この状況でパンダのパジャマを着せようとするのって、逆にとんでもない変態だったりする……？）

永森さんの顔を思い浮かべる。お隣の七〇二号室に住む彼は、いつもスーツ姿がビシッと決まっていて、革靴がピカピカ、俳優さんみたいに顔が整っている。たまにエレベーターで一緒になったら挨拶するくらいの関係だけど、「おはようございます」「こんばんは」「お先にどうぞ」って言う低い声がかっこよくて――

「変態っぽくは……ないよね？」

小さく呟く。むしろ、変態であってほしくない気持ちが強かった。

服を脱いで、パーカーに袖を通し、ジッパーを引き上げる。ズボンを穿いて洗面の鏡を覗き込んだ。似合っているといえば似合っているし、似合っていないといえ

ば似合っていない。微妙なラインだ。フードを被って少し俯くと、鏡に映っていた私が消えて、完全にパンダになる。

（これでいいのかな……この後、なにが起ころの？）

だんだん不安になってきたけど、もう引き返せない。「なんでもします」と言ったのは私なんだから。

きっかけは大学の敷地内に捨てられていた子猫だった。

飼い主が見つかるまで保護して欲しいと友人に頼まれ、断り切れなかった私は、こっそりペット禁止のマンションに連れ帰ってしまった。「芽依はこんなに可愛い猫ちゃんを放っておけるの？」と言われてしまったら、気の弱い私に言い返せるはずもない。

そしてたった三日で永森さんに見つかった。子猫の夜鳴きが、隣の部屋や廊下まで聞こえていたらしい。

「ここの管理会社、かなり厳しいから。バレたら、最悪強制退去ですよ」

厳しい顔で忠告してくれた永森さんに半泣きで事情を説明すると、里親探しを手伝ってくれることになった。そして、その日の晩には引き取り手を見つけてきてくれた。

「俺は大したことでしてませんよ。ちょっと知り合いに声をかけただけです」

さらりと言っていたけど、永森さんがいなかったら私は子猫ごとこの部屋から追い出されていたかもしれない。結局、友人はほとんど何もしてくれなかったし、バイトもサークルもしていない私は声をかける相手がほとんどいなかったから。猫を無事に引き渡した後、七〇二号室を訪ねた私は、会話の流れで思わず口にしてしまった。「私にできることなら何でもしますから、何かお礼させてください」と。

「何でも、ねえ……？」

あの時の永森さんの表情を思い出すだけで、顔がかあつと熱くなる。片眉を器用に上げて、唇の端をきゅつと吊り上げた、ちよつと意地悪そうな顔。彼氏いない歴

イコール年齢の女子大生には刺激が強すぎる。

「ち、違います！ いや、違わないけど、そういう変な意味じゃなくて……その、できる範囲で、というか！」

必死に両手をぶんぶんと振って言い訳をしたけど、もう取り返しがつかなかった。永森さんは私の反応を楽しむようにわざとゆっくり顔を近づけてきた。

「……そういうの、男に気軽に言っちゃだめですよ。特に、野上さんみたいな可愛い子は、ね？」

家族や親戚以外の男の人に「可愛い」って言われたのは、あれが初めてだった。思い出すと胸に甘い気持ち広がる。永森さんからしたら大したことのない一言かもしれないけど、私にとっては一生の宝物になる言葉だ。

そして永森さんはゆっくりと七〇二号室の扉を開けて、お姫様を優雅にエスコートする王子様みたいに、指を揃えた手で中を指し示した。

「部屋入ってください。お願いしたいこと、思いつきました」

その「お願いしたいこと」が、まさかパンダの服を着て欲しいだなんて、その時の私が想像できるわけがなかった。

大きく吸って、大きく吐く。まだ気持ちは落ち着かないけど、いつまでも洗面所にこもってもいられない。

ドキドキしながらリビングの扉を開けると、ソファーに座っていた永森さんが、バツとこちらを振り返った。視線が合う。息が止まりそうになる。

「ど、どうでしょうか……？」

緊張で足がすくみそうになりながらも、なんとかソファーの前に立った。永森さんは目を見開いて、私をじっと見つめていた。視線で穴が開いてしまいそうだ。

肌はほとんど露出していないとはいえ、こんなに見られていると全身がじわじわ熱くなる。永森さんの口が、何かを言おうとして開いた。

「か」

そこで止まる。どうしたんだろう。お気に召さなかったんだろうか。両手でフー

ドを深くかぶり直すと、永森さんは大きく息を吐いて、喉の奥から絞り出すような声を出した。

「かわいいっ……」

いつもキリッとしている瞳が甘く歪んでいる。頬はうつすら上気して、呼吸が乱れている。危うさを感じるくらい恍惚とした表情は、ちよつと怖くて——何だかえっちだった。

「すごくい……かわいい……最高……可愛い……かわいいね……」

永森さんの視線は全くぶれない。一度も目をそらさず、飽きることなく、永森さんは言葉を重ねる。宝物みたいに大事にしたかった「可愛い」の一言をこんなに連発されると、照れるとか嬉しいというよりも、「本当にいいんですか？」と、逆に不安になってくる。

「あ、あの、野上さん、ちよつと一回転できますか？ 大丈夫、大丈夫……俺が見ただけですから……！」

「あ、はい……」

言われるがまま、その場でゆっくりと回って見せる。

「そう、そう……はい！　そこで止まって！　ああ……後ろ姿も最高……いい……」

後ろ向きだから確信を持って言えないけど、それでも背中に視線が張りついているのが分かる。変態だ。変態のお兄さんだ。どうしよう。逃げた方がいいのかもしれない。

「あ、あの……私……」

「あっ……！　すみません、説明不足でしたね」

永森さんは少し我に返ったように、こほんと咳払いをした。

「野上さんには今日から何日か、この部屋でパンダちゃんになって暮らしてほしいんです」

「パンダ、ちゃん」

「はい、パンダちゃんです。期間は……三日間くらいかな。特別なことは何もしなくていいので、好きな時に、好きな場所で、パンダみたいにゴロゴロしててください」

何を言われているのか、一瞬理解できなかった。三日間。この部屋で。パンダになつて。ゴロゴロ。どうしてもそれが「お礼」になるのだろうか。

永森さんの顔を見る。冗談を言っているようには見えない。真面目な表情だ。

「あ、あの、なんで……」

「俺、パンダがすごく好きなんです。部屋を見てもらえば分かんと思うんですけど、緊張しすぎて今まで気づかなかったけれど、改めて部屋を見渡すと、棚やソファ、壁、そこかしこにパンダグッズが飾られている。クッション、ぬいぐるみ、置物、ポスター。モノトーンを基調とした部屋に、それらは驚くほど自然に溶け込んでいたから、分からなかったのかもしれない。

「昔から、パンダを飼うのが夢だったんです。でもワシントン条約とかがあるで

しょう？　できればパンダになりきってくれれば嬉しいんですけど、難しければゴロゴロしてるだけでも構いませんから……どうでしょうか？」

話している内容はかなり突飛なのに、きらきらと輝く瞳や弾んだ声のトーンから本気が伝わってくる。永森さんは本当にパンダが好きで、心の底からパンダと暮らしたいと願っている。私にできることなら、叶えてあげたい。そう思った。唯一懸念点があるとするなら――

「三日ってことは、ここで寝泊まりするんですよね？」

「……はい、そういうことになりますね」

永森さんは少し気まずそうに視線を逸らした。二年くらい隣で暮らしていたとはいえ、知り合ったばかりと言ってもいい男性のLDKに三日間も泊まり込むなんて、実家の両親が知ったら卒倒しそうだ。

でも、ちよつと変わった人だけど、子猫のことで助けてもらったばかりだし、悪い人ではないと思う。

「変なこと、しませんよね？」

「……絶対にしないから、安心してください」

まっすぐな瞳は、嘘を言っているようには見えなかった。今日は三連休初日の土曜日。予定は特にない。深呼吸をして、覚悟を決めた。

「パンダのこと全然詳しくないんですけど……私でよければ、よろしくお願いします」

永森さんの顔が、ぱあっと明るくなった。

「ありがとうございます！」

欲しかったおもちゃを買ってもらった子供のような、無邪気な笑顔だ。自分の言葉でこんなに喜んでくれる人がいるなんて——なんだかこちらまで嬉しくなってくる。

「じゃあ早速なんですけど、晩御飯は何かいいですか？」

永森さんの目が期待に輝いている。これは、もうパンダごっこが始まっていて、

パンダらしい答えを求めているということだろうか。

「竹とか……笹とか……？」

思わず口をついて出た言葉に、永森さんは吹き出した。肩を震わせながら、おなかを抱えて大笑いしている。

「あはは！ さすがに俺も、そこまでなりきってなんて言いませんって！」

ああ、やっぱり変だった。調子に乗りすぎてしまった。一気に顔が熱くなる。

「じゃ、じゃあ！ なんでも大丈夫です。アレルギーとか苦手なものとか、全然ないし……」

「野上さん」

永森さんは急に笑うのをやめた。さっきまでの楽しげな雰囲気が一変し、まっすぐな視線に射抜かれて、息が止まりそうになる。

「パンダって、飼育員が頑張って用意した笹も、好みじゃなかったら全く手を付けないんです。だから、俺もパンダちゃんにいっぱいワガママ言われてみたいなと

思っていたんですけど……どうですか？」

声色は穏やかなのに、どこか有無を言わせない圧を感じる。

上京してから、すっかり自己主張が苦手になっていた。「変な子」と思われるのが怖くて周りに合わせていたら、自分の気持ちを口にすることができなくなった。どうしよう。食べたいものってなんだろう。もし、ここが自分の家だったら、私は何を食べるかな……選択肢を与えられているのに、追い詰められているような気分になる。

「……お昼ごはんはパスタを食べたので、それ以外だと嬉しいです」

かろうじて出てきた答えは「食べたいもの」とは少し違っていたけど、永森さんは満足そうに頷いた。

「わかりました。パスタ以外ですね。おいしいごはんを用意するから、待っていてください」

キッチンへ向かう背中を見送って、私はソファに腰を下ろした。張りつめてい

た体の力が抜けて、もこもこした柔らかい生地感触に意識が向いた。気持ちいい。このブランドのパジャマ、こんなに着心地がいいんだ。

これから三日間、私はパンダになる。ならなくちゃいけない。とりあえず、ぽてつと転がって待っていたら、永森さんは喜んでくれるかな。



「パンダちゃん、歯磨きの時間ですよー」

低く甘い声が、やさしく鼓膜をなぞった。ソファーに寝転がってまどろんでいた私は、ゆっくり瞼を開ける。名前ではなく、「パンダちゃん」と呼ばれるのにも、「お世話」をされることにも、この二日間ですっかり慣れた。

体を起こして、永森さんの座るスペースを空ける。ソファーに腰を下ろした彼の膝の上に、そっと頭を載せて、口を大きく開く。歯医者さん以外の人に口の中を見

られるのはまだ恥ずかしくて、目はとてもじゃないけど開けられない。

「はい、おうち、ぱっかーん……そうそう、上手にできましたねえ」

子どもをあやすような声とともに、大きな手のひらに顎をやさしく支えられた。紫色の歯ブラシがそつと口の中に差し込まれ、やわらかな毛先で歯の表面をゆつくり撫でられる。

シャカ……シャカ……シャカ……シャカ……

歯の一本一本が、丁寧に磨かれているのを感じる。自分でする時よりもずっと入念に、細かい場所まで綺麗にしてもらえる気持ち良さもあるけど、背中がぞわぞわするような違和感の方がはるかに強い。

「パンダちゃんの歯、ちっちゃくて可愛い……」

吐息交じりの言葉と共に、毛先が上顎に触れた。ビクンと身体が跳ねそうになるのを、ソファアの布地に指先をぐつと押し込んでどうにか堪える。

「奥のほうも、キレイキレイしましょうね……もっと大きく、お口あーんできます

か？」

口角に永森さんの指がかかり、そのままぐいつと横に引っ張られる。抵抗する隙も与えられず、ブラシの先が舌の表面をかすめて奥へと進んできた。

（普通の歯磨きなのに、なんでこんなにえっちな感じなの……!?　だめ、だめ、もう、変になっちゃう……!）

「はい、おしまい。ブクブクうがいしてきてね」

パツと口から手が離れる。目を開くと、視界いっぱいにご機嫌な表情の永森さんが映った。

この二日間、ずっとこんな調子だった。「ゴロゴロしているだけでいいから」と言っていたけど、永森さんの中には理想の「パンダちゃんとの暮らし」がはつきりあって、それに従った行動を求められた。

食事は「パンダちゃんはお箸もフォークも使わないよね？」と全て永森さんの手で食べさせられる。スマホは初日にやんわりと取り上げられてしまった。「パンダ

ちゃんは、スマホなんて見ないよね？」という理屈らしい。お風呂やトイレはさすがに自分でしているけど、お願いしたら多分やつてもらえたと思う。

スマホがないと、食べて、眠って、ゴロゴロするだけの一日はあまりにも長い。

その中で見つけた楽しみは、永森さんを観察することだった。

今まで男の人と深くかわることがなかったから、何もかもが新鮮だった。筋トレってこうやるんだとか。卵を片手で割れちゃうんだとか。寝起きはこんな風にあくびをするんだ、とか。

うがいをしてリビングに戻る。ちょこんと永森さんの隣に座ると、フード越しに頭を撫でられた。最初に撫でられた時はびっくりしたけど、今はその手が心地よくて、つい自分からなでなでを求めるように近寄ってしまう。

「本物のパンダの毛って、結構ごわごわしてるんだって」

永森さんは手を止めずに、ぽつりと呟いた。

「野生動物だから仕方ないってわかってるけど……俺、それ聞いた時結構ショッ

クだったんです。でも、パンダちゃんはふわふわ……完璧に俺の理想です。ありがとうございます。俺の夢を叶えてくれて、本当に嬉しいです」

ふわふわなのは私じゃない。このパンダのルームウェアだ。そう分かっているけど——私なんかでも、誰かの願い事を叶えられたということが嬉しくて、胸が温かくなる。

（ありがとうって言うのは、私の方かも……）

可愛いって言うてくれてありがとう。お世話をしてもらえて恥ずかしかったけど嬉しかった。

言葉で伝えるのは恥ずかしくて、代わりに永森さんの胸に飛び込んだ。もここの腕を広い背中に回す。

「え——」

私の腕の中で、永森さんの体がビクッと固まる。可愛い。この二日間で一生分くらいドキドキしたけど、今は私が永森さんを動揺させていると思うとちよつとだ

け得意な気持ちになる。

「あ……あの、野上さん……?」

「い、今は、パンダなので……」

顔を上げずに、小さな声で答える。自分から始めたことだけど、恥ずかしくて永森さんの顔を見られない。

「あ……パンダ」

「そう、パンダです……」

「そっかあ……パンダちゃんは、甘えん坊なんですね」

永森さんの手が、そっと私の背中に回る。大きくて、温かい手がぎゅっと私を抱き締める。

ごはんを食べさせてくれて、歯磨きをしてくれて、私を撫でてくれる優しい手。好き。

たった二文字が、すとな、と胸の奥に落ちる。名前がついたばかりの気持ちを確認

かめるように、私は永森さんの背中に置いた手にそっと力を込めた。

一緒に寝ませんかと誘ったのは、私からだった。

この二日間、永森さんはベッドを私に譲って、ずっとソファで眠っていた。「意外と寝心地いいんです」と笑っていたけど、朝になると首を回したり腰を伸ばしたり入念にストレッチをしていたから、決してぐっすり安眠できているということはないだろう。

今日で三連休もおしまい。明日から仕事があるんだから、無理をして欲しくない。「俺はソファでも平気ですよ」

「ダメです。ここは永森さんのおうちなんだから、永森さんがベッドで寝てください」

でも、と洩る永森さんの耳元に、そっと顔を近づけて内緒話をするようにこしよこしよと囁く。

「パンダちゃんと添い寝って……なかなか出来ないんじゃないですか？」

ごくり、と永森さんが喉を鳴らす音が、妙に大きく聞こえた。

「じゃあ……お願いします」

「はい、こちらの方こそよろしくお願いします」

お互いにぺこりと頭を下げ合うのがおかしくて、顔を見合わせて笑ってしまっ
た。

こんなに上手くいくなんて思わなかった。「して欲しいこと」とか「したいこ
と」って素直に口に出してもいいんだ。

もこもこのパンダのルームウェアに心の中でそっとお礼を言う。もうちよつと
だけ、大胆になれる魔法を貸してほしい。

ベッドに入って、少し迷ったけど永森さんに背中を向けた。

一人で寝るには広々していたセミダブルのベッドも、二人だとちよつとだけ狭
く感じる。ちよつとだけくつついた背中がぽかぽか温かい。

緊張もするけど、それ以上に誰かと——好きな人と同じ布団にいることに幸せを感じた。

「大丈夫？ 狭くない？」

今までで一番近い距離で永森さんの声がする。もしかすると背中を向けているのは私だけで、永森さんは私の方を向いて横になっているのかもしれない。

振り返って確認する勇氣はなくて、私は布団の中に顔を半分うずめたまま「大丈夫です」と答えた。

本当は全く大丈夫じゃない。平気なふりをしてるけど、心臓はずっと落ち着かない。この音が背中から伝わっちゃっていたらどうしようと考えはじめると、余計に鼓動が早くなった。

布団の中に、シャンプーと柔軟剤と、永森さん自身の肌の匂いが混ざった香りがこもってて、息をしているだけで頭がふわふわしてくる。

「おやすみなさい、野上さん」

「おやすみなさい、永森さん」

重なった声が、そつと部屋に響いたあと、静けさが戻ってくる。しばらくすると、背中越しに規則正しい寝息が聞こえてきた。思ったよりずっと早い。やっぱりソファーじゃぐつすり眠れなかったんだろう。

静かに顔を横へ向ける。永森さんは仰向けで眠っていた。寝顔を盗み見ようと、首を伸ばす。羨ましいくらい睫毛が長い。すうすうと寝息を立てる唇はほんの少し開いている。

（この唇とキスしたら、どんな感じなんだろう……）

経験のない私には想像することしかできない。でも、きっとすごく気持ちいいと思う。

（すき。すき。永森さん、だいすき……）

心の中で何度も繰り返す。言葉にできない気持ちだが、胸の奥でどんどん膨らんでいく。

パンダになっている間は、本当の自分じゃない「誰か」になれた。永森さんが夢見る「可愛いパンダちゃん」として、素直に甘えることができた。でも、明日からはまた元の私に戻る。大胆なことなんて何もできない、気弱な女子大生に。

そうしたら、この部屋で過ごしたことも夢みたいに消えてしまうのかもしれない。そうなったら、永森さんと私の関係は、「おはようございます」「こんばんは」「お先にどうぞ」みたいな決まりきった挨拶しか交わさないただのお隣さんに戻ってしまう。

（それって……なんか、さみしいな）

眠れない。永森さんの寝息は規則正しくて、深い眠りに落ちていることが分かる。私だけが、目を開けたまま、暗闇を見つめている。

その時、永森さんの指先がぴくりと動いた。寝返りを打とうとしたのか、無意識に伸びた手が私の太ももに触れる。心臓が跳ねあがる。男の人にそこを触られるのはもちろん初めてのことだ。

体の向きを少しだけ変えて、太ももでそっと手を挟んだ。

私の足の間——誰にも触られたことのない場所に、永森さんの手が触れている。布団の中の温度が、急に高くなる。分厚いこもこ素材に包まれた背中がじっと汗ばんでいる。でも、きつとこれは暑さのせいだけじゃない。

（ちよつとだけ……本当にちよつとだけだから……）

心の中で言い訳をしながら、太ももにほんの少しだけ力を入れた。誰にも触らせたくない、自分でも勇気が出なくてたまに指先でなぞるくらいの場所に、小さな快感が生まれる。

こんなことしちやいけない。頭では分かっている。でも、自分で触る時よりずっとずつと気持ちいい。

（……永森さんの手……）

意識するだけで、下腹部がきゅうきゅう疼く。呼吸が荒くなってしまうようで、パーカーの袖を口に当てて、必死で息を抑え込んだ。

（永森さんに気づかれたらどうしよう……でも止められない♡　今だけだから♡
ちよっただけだから……♡）

太ももをほんのわずかにすり合わせるように動かすと、永森さんの手の位置が微かにずれる。もどかしいくらいに弱い刺激だけど、背中に電流みたいな快感が走った。

（ごめんなさい、ごめんなさい……♡）

心の中で何度も謝りながら、私は夢中になってもぞもぞ足を動かしていた。

——永森さんが、とくに目を覚ましていることにも気づかずに。

「ねえ……何してるの？」

あんなに熱く火照った体が凍りついたように一気に寒くなる。

顔を上げると、怖いくらいに静かな瞳が私を見下ろしていた。いつから起きていたのだろう。表情は穏やかなのに、その目の奥には——いつもと違う色が見える。

「あ……あの、わたし……ごめんなさい……」

声が震える。頭が真っ白だった。体を離そうとすると、強い力でがっしりと腰を掴まれて身動きが取れなくなった。

「俺は、何をしていたのかを、聞いているんですけど」

永森さんはゆっくりとため息をつく、私の耳元に顔を近づけた。

「野上さん」

名前を呼ぶ声は、いつもより低かった。

「俺に、発情してるの？」

「なっ……!!」

あまりに直接的な表現に息を呑んだ。そんなつもりじゃないと否定したいけど、私のしていたことは「発情」でしかない。何の言い逃れも思いつかなかった。

永森さんの瞳が、まっすぐ私を射抜いてくる。逃げ道なんて、どこにもない。言葉を探していると、永森さんの方が先に口を開いた。

「パンダはね、発情期が年に数日しかないんです」

永森さんの手がズボンの中に忍び込む。

「それ以外の時はえっちな気持ちになったりしないんですよ。——清楚で可愛いよね」

敏感な突起を見つけてぐいと強く押され、喉の奥から甘い声が漏れ出すと、叱るようにトントンと優しくタップされた。

「だから——こんなにびしょびしょに濡らしちゃダメですよ」

ぐじゅぐじゅに湿った布ごと指でぐりぐり押し潰されるたびに、頭がびりびり震える。

「んっ、ひあっ……♡ あひっ……♡」

喉が勝手に開いて、情けない喘ぎ声が唇からこぼれ落ちた。円を描くように、くすぐるみたいに、指を載せてぶるぶる震わせて——永森さんの指は小さな突起を刺激しているだけなのに、全身が燃えるように熱くなる。

「腰、ずーっとビクビクしてる。パンダちゃんは、くるくるするのも、ブルブルす

るのも、ゼーんぶ好きなんですわ……」

ゆっくりと撫でられるごとに、どんどん力が抜けていく。なのに、腰だけと言うことを聞かなくて、何度も何度も跳ね上がる。

「むくむくーって膨れてるクリに、布がぴったり張り付いちゃった。パンダちゃんのおまめ、おつきくて可愛い……」

「ああっ♡ だめ、だめ、さわるの、だめえ♡ わ、わたし、パンダじゃない……♡」

ブンブンと頭を振る。恥ずかしいのに。逃げ出したいのに。必死に否定しようとする私の声はさらなる快楽をねだるように甘く掠れていた。

永森さんはニヤリと口角を吊り上げて、私の耳元で囁いた。

「違うんですか？ パンダじゃないなら——よく知らない男の家なのにこのこ上がり込んでオナニーしちゃう人間の女の子ですわね」

ちゅぷっ♡ ちゅっ♡ ちゅぷぷっ♡

下着の中に手が入り込んで、小さな粒を指でつまみ上げて左右にゆらゆら揺らした。自分の体がこんなにあツちな音を立ててるなんて、知らない。信じたくない。「優しくお世話されてるうちにムラムラしてきて、寝てる人の手でおまんこギュッとしてる変態女子大生と、季節外れの発情をしちゃったうっかりパンダちゃん。どっちがいい？」

耳に落ちてきた問いかけに、思考がぐにやりと歪んでいく。永森さんがつまんでいたクリトリスの先端を爪の先でカリカリと引っ掻いた。

視界がぱちんと白く弾ける。熱が広がる。脳の奥がしゅわしゅわと痺れて、足先が痙攣したみたいにピクピク震えた。

「あ、ああ……♡ パンダ、パンダです……♡」

答えはもう決まっていた。それが、永森さんの望む答えだからだ。足を大きく開いて、恥ずかしい場所を差し出す。

「うん、やっぱりパンダちゃんだ……じゃあさ」

ぴちゅっ、ぴちゅぴちゅ……♡　ぐり、ぐりぐり……♡　ぬちゅっ、ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ……♡♡

つまんで、押して、なぞって、離して、また押し上げて――

「発情するの、我慢できるようにならなくちゃね」

声にならない悲鳴が喉の奥からこぼれた。

手足をバタつかせて快感を逃がそうとすると。「危ないでしょ？」とクリトリスを捻り上げて咎められる。足の間に体が入り込み、両手を頭上で一まとめに拘束された。

「じたじた暴れるの、可愛いね。でも、ダメ。違う方法で気持ちいの我慢しようね」

「ひあああ♡　ああっ♡　やっ♡　むり♡　むりいっっ♡♡」

「無理じゃないよ。そうやっておつきな声でアンアン喘いでるから気持ちよくなっちゃうんだよ。おしゃべりなパンダちゃんも可愛いけど、人間の言葉はちよっ

とだけ我慢しようね」

永森さんの指先が、潤んだスリットを往復するようにゆっくりとなぞる。ちゅぷちゅぷといやらしい水音と共に、奥からさらにぬるぬるした液体が溢れ出すのが自分でも分かった。

「あっ♡ だめっ♡ やだ、やだあ♡」

「喋ったら、変態女子大生になっちゃうよ?」

「あっ♡ ちがっ♡ ちがあっ♡」

「アンアン、我慢できるかな?」

「んっ♡ んうっ……んむっ……♡」

唇を噛んで、必死に声を押し殺す。いくのも喘ぐのも我慢するように言ったのは永森さんなのに、その指は容赦なく私の弱いところ——外側と内側の両方——を的確に押してくる。

ちゅぷちゅぷ……♡ くちゅ♡ くちゅ♡ ぬぷ……♡

体が熱い。部屋の空気も、むわっと重く、いやらしく湿っている。

ズボンと下着はいつのまにか脱がされてしまったけど、もこもこのパーカーはフードもそのまま残されていた。身じろぎするために頬に触れる白い布が、この状況から現実感を奪っている。永森さんも服を着たままで、首筋を汗が伝っている。

二人とも汗をかいているのに、服を脱ぐ気配も脱がされる気配もなかった。

「鼻の穴、ぽっかり大きくなっていくの我慢してる……眉毛もぎゅうぎゅう寄って、ふーっふーって息吐いて、なっさけない、かわいいお顔……♡」

浅く沈んでいた指が、ぐっ……と奥へ差し込まれる。ぬちゅ、ぬちゅぬちゅ♡と音を立てて内側をかき混ぜはじめ、内側を押し広げるようにくちゅくちゅ蠢く。

「んっ……♡ ふううっ……♡ ふうっ♡ ううーっ♡♡」

「ふふ、我慢じょうずー……♡ パンダちゃん、繁殖の季節はまだですよお……♡ 今発情しても、交尾してくれるオスがなくて、キューンキューンって寂しく鳴かなきゃいけませんよお……♡」

時折、指先が出口ギリギリまで引き抜かれてから、ぬぷ、と再び深く押し込まれる。

さらに「……二本、いけるかなあ？」という声と共に増えた指が、入り口をぱくぱくと遊ぶように広げる。

くぱあ♡ くぱくぱっ♡ ぬちよっ、ぬちよっ、ぬちいっ♡

（あぁっ……♡ ひどいっ……♡ 女の子のおまんこで遊ぶなんてひどすぎる……♡）

抗議するように永森さんを見つめると、「悔しそうに睨むのかわいい……♡」とうっとりされてしまった。

『『イッチやダメなの♡♡ 我慢しなきゃパンダになれないの♡♡ 永森さんにイカされちゃう♡♡』ってお顔、とっても可愛いね』

「っ、ふうううっ♡♡ んっ♡♡ くううっ♡♡」

揃えた指がゆっくりと中に入ってくる。異物感と圧迫感が一気に増して、内側の

肉が反射的に永森さんの指を締めつけた。

「きつきつなの、とろつとろ……♡ これ、処女なのにオナニーしまくってる子のおまんこじゃない？ えっちな、ドスケベパンダちゃん♡」

「あっ♡ ちがつ♡ しないっ♡ こわいから、おにやにーしてないいい♡」

「えー？ ほんとかなあ？」

本当なのに。ほとんど初めてなのに。指を入れたことは本当に本当に全然ないのに。永森さんは私が気持ちよくなれる場所を知り尽くしてるみたいにくちゅくちゅ執拗に探ってくる。

ぬちゅっ♡ ぬぷう、ぬぷう、ぬぷう♡ くちゅん、ぐちゅううっ♡♡

視界がチカチカしてくる。おなか側をこすられた瞬間にととう堪え切れずに甲高い声を上げてしまうと、永森さんは声を上げて笑った。

「あーあ、えっちな声出ちゃったねえ。頑張って我慢してたのに、残念でしたあ」

「っ……ん、あ、んん……！ ちがつ、ちがあ……♡」

「んーん。ちがわなーい。パンダはこんなに簡単に発情しないから、やっぱり人間の女の子なんだね。そっかあ……」

失望したような声のトーンに焦った体が勝手に動いてしまう。私は必死に腰をくねらせて、永森さんの体にすがりついた。

「あっ♡ パンダですっ♡ パンダだからあっ♡ イかない♡ イかない♡
もう発情しにやいからあっ♡」

「んー？ 人間の言葉が聞こえるねえ？」

「あっ♡ ううゝっ♡ うっ♡ ぐう♡ ぐうゝゝっ♡♡」

「ふふ、かあわいい♡」

甘ったるい囁きと一緒に、永森さんのもう片方の指が、クリトリスを押し潰すように、ぐり、ぐり……♡ とこね始める。

外側からじつくりと逃げ場を塞ぐみたいにな、敏感な粒を撫でて、潰して、引っ掻いて。

中に差し込まれた指が同時に、くちゅ、くちゅっ……♡ と膣内をかき混ぜながら、時々、奥をとん、と突き上げる。中と外を一緒にいじめられて、一瞬で意識が吹っ飛びそうになるのを、シーツを掴むことで必死に堪えた。

「や、やあっ……あ、あっ……んう……♡」

くちゅくちゅ、ぐちゅっ……♡

ぐりっ、ぐりぐり……♡ ぴちゅっ……♡

中で蠢く指に合わせて、クリをこねる手も激しくなっていく。力を抜こうとしているのに、腰が勝手にぴくぴく跳ねてしまう。思考が追いつかない。頭の中がじわじわ、快感で塗り潰されていく。

「声、おっきくなってきたね。もうイっちゃいそう？ 大丈夫？」

「ひっ♡ い、いかな……っ、いかな……っ」

「こら、パンダは喋っちゃダメ♡」

「~~~~っ♡ や、あっ、あああっっ♡♡♡」

喉の奥から、どうしようもない悲鳴みたいな声がこぼれた瞬間、体の奥で何かがぱちんと弾けた。背中がびくんって大きく反り返る。下腹がぎゅううって縮まって、脚の付け根が震えて、ぷしゅっ♡ と何か温かいものが噴き出した。

（や、やだあ……なんか出てる……っ♡ 何これえ……っ！）

びしゃっ♡ びしゃびしゃっ♡

溢れた液は内ももを伝って、お尻まで流れ落ちる。この感じだと、シートもきつと濡れてしまっているだろう。

「イッちゃった？」

「あ……ち、ちがあっ……イってない♡ イってないからあ……♡」

「あれ、潮吹きじゃなかったんだ。——じゃあ、お漏らししちゃったんだね」

「う~~~~っっ♡♡♡」

恥ずかしい。ひどい。こんなのもう嫌なのに……♡ イッたばかりの私のおまんこは、次の快感を待ちわびるみたいにひくひく震えている。永森さんは愛液と潮で

ぐちよぐちよに濡れた私の恥ずかしい部分をじっと見つめて優しく微笑んだ。

「大丈夫。パンダちゃんだから、おトイレの場所間違えても仕方ないよ」

指が再び割れ目をすりすり撫ではじめる。ぬるぬると濡れたそこが素直に反応して、勝手に腰が揺れてしまう。

「んっ……♡ んっ♡ んっ♡ あ、くっ、ひうっ♡」

永森さんは悶える私を見下ろして唇の端をゆるく吊り上げて、「我慢しようね♡」と意地悪に囁いてくる。指がずぷつと奥まで入り込んで、深い場所でぐちゅぐちゅといやらしい音を立てた。

「ううっ♡ やう♡ んっ♡ んうう♡♡ つ♡ つ♡ んむうううっ♡」

「ふふ、声頑張って我慢してるねえ♡ イかない♡ イかない♡ イッちゃダメ♡ パンダちゃんは発情しないよー♡ クリトリスちゅこちゅこされたくらいでイかない♡ おまんこ指でずぼずぼされても潮吹きしないの♡ がまん♡ がまん♡ イっちゃダメ♡♡♡」

ぐちゅぐちゅ♡ ずぽっ、ずちゅっ♡ ずちゅずちゅずちゅずちゅっ♡♡

くちゅくちゅっ♡ ぬっちゅぬっちゅぬるんっ♡♡♡

腰の奥にどんどん快感が溜まっていく。今すぐにもイってしまいそうなくらい気持ちがいいのに、「イッちゃダメ」という言葉に縛られているのが、つらくて、苦しくて、気持ちいい……♡

「も、もう、やあっ……♡ むり、むりいっ……♡♡ がまんできないい♡」

腰を情けなくへこへこ動かして降伏する。限界だった。気持ちよくなりたい。イかせてほしい。いやらしい子と思われても、もう構わない。

「無理？ イッちゃうの我慢できない？ 可哀想なパンダちゃん……まだ繁殖の時期じゃないのにねえ……」

「おねがい、おねがいい……♡ イきたい、イかせてえ……♡ ゆるしてえ……♡」
涙声混じりに懇願すると、永森さんは口元をゆるめて笑った。

「仕方ないなあ……パンダちゃんは、ほんつとに甘えんぼさん♡」

ぴとっ♡ クリトリスにそっと指先が触れた。

「いいよ、パンダちゃんのワガママはぜーんぶ聞いてあげる……イかせてあげるね♡」

ぐちゅぐちゅっ♡ ぬちゅぬちゅっ♡♡ ぐりゅぐりゅっ♡ ぐちゅぐちゅっ

♡♡

今までの責めは予行演習だったのかと思うほど、段違いの激しさで責め立てられる。指がぬるぬるになったクリトリスをぐにぐにと押し潰すようにこね回す。

「あっ……ああっ♡ ま、まってえ♡ はやいっ♡♡」

クリトリスをぐりぐり擦られながら、指の腹がびっしょびしょのおまんこを容赦なく掻き回す。一番奥まで届いた指がえぐるように行き止まりを叩くと、頭がかしくなるくらいの快感が押し寄せてくる。

「いきそうな時はおっきな声で「イッちゃう♡」って鳴こうね。ちゃんと教えてくれないと、俺、わかんないから♡」

ずちゅっ♡ ずちゅずちゅっ♡ ずっぷずっ♡♡

ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡ ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ♡♡

「ひあっ♡ ばくっ♡ ばぐっ♡ いっちやうからああゝっ♡♡」

「いいよ♡ イッて♡ イッて♡ 可愛いイキ顔、俺に見せて♡」

腰が跳ね上がる。奥の奥からせり上がった快感が、堰を切ったみたいに一気に溢れ出す。

びしゅっ、びしゅびしゅっ♡♡ じよばばばあああっ……♡♡♡

二度目の絶頂と一緒に潮が溢れ出す。癖になっちゃったのかもしれない……♡
太ももがガクガクと震える。

シートに沈み込んだ体がまだビクビク反応してて、息もまともにできない。絶頂の余韻に飲み込まれている私を見下ろしながら、永森さんがうつとりと目を細めた。

「イク時の鳴き声、すっごく可愛かったあ……♡」

ふわりとフードが外される。火照った頭が冷たい空気に触れて、息が少しずつ落ち着いていく。

大きな手のひらが、前髪を撫でつけるように優しく何度も撫でた。甘い声も、汗で額に張り付いた前髪を丁寧に整える手付きも、とても優しいけど、私を見つめる瞳はどろりとした色を宿している。

「へ、変なことしないって、言ったのに……」

涙声で訴えても、永森さんの表情は変わらなかった。耳元にそっと顔を寄せて、ゆっくりと囁かれる。

「大人って、ずる賢いんだよ。可愛い女の子が部屋に上がり込んで『ぎゅってしちゃう♡』とか『一緒に寝ましようよお♡』って甘えてきたら、ぱっくり食べちゃうの。お勉強になってよかったね」

（やっぱり、とんでもない変態の人だった……）

見た目で人を判断しちゃいけませんとか、よく知らない人の家に上がっちゃい

けませんとか、子どもでも分かる当たり前のことを私は理解していなかった。なんて愚かなんだろう。

なのに、永森さんに抱きしめられると、温かくて、落ち着いて、幸せになってしまふ。正常な思考がどんどん溶けていく。

「パンダちゃんは気持ちいいの、好き？」

背中がゾクゾクする、えっちな声。答えは決まっている。

「……すきい……♡」

優しくしてもらえるのも、ちよつと意地悪をされるのも、気持ちよくしてもらえることも、大好き。

「すき、すき……♡」

とろけた声で呟きながら、永森さんの胸に頬ずりする。永森さんは私の頭を撫で続けながら微笑んだ。

「素直で可愛いおりこうさん♡」

頬にそつと唇が触れた。たった一瞬、かすめるくらいだけど、人生ではじめてするキスだ。頬が一気に熱くなる。

「かわいい反応……♡ キスも、初めてなの？」

必死にこくこくと頷くと、永森さんは「そっかあ」と嬉しそうに目を細めて笑った。

「俺がこれから、いっぱい色んなこと教えてあげる。楽しみにしててね。えっちなパンダちゃん♡」

今度は唇と唇が重なる。甘く、深く、私のことを逃がす気なんてないよって伝えるみたいな唇。それは、正真正銘、私のはじめてのキスだった。